

# 青年部・女性部

## 環境配慮、柿の町事業

### 埼玉県皆野町商工会女性部

「アチャムシタンベにつるし柿」と「秩父音頭」のはやし言葉にもあるように、秩父地方では農家の軒先に吊るされた「つるし柿」が秋の風景ともいえ、昔から柿の栽培が盛んだった。しかし、最近あまり柿を食べなくなったり、農業の後継者不足から柿の木が放置され、秋に柿の実を収穫しない家が増えている。

平成十六年、そんな柿の実を活用して健康食品である「柿酢」をつくり、これを利用した新たな地域の名産品をつくろうと、商工会が中心になり、町、JA、柿生産組合などの協力を得て「柿酢プロジェクト事業」の取り組みが始まった。

#### 柿酢プロジェクトの狙いは

##### ●その一 コミュニティづくり

団塊世代が定年退職を迎えて、故郷に、地域に戻ってくる。故郷をもう一度、ゆっくり楽しみなながら、地

域のために役立ち、生き甲斐を持つて暮らせる町にしたい。

##### ●その二 山村地域の環境保全

先祖が血のにじむ思いをして切り開いた畑が、高齢化・過疎化により、今、森になろうとしている。そこで、手入れができなくなった柿畑を提供していただける「柿主様」を募集し、その柿の手入れをボランティアの「しづがき隊」が管理し、昔のように美しい山村風景を蘇らせたい。

##### ●その三 特産品づくり

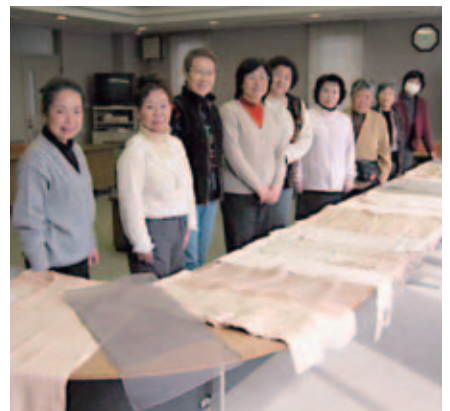
ボランティア「酢づくり隊」が、収穫した柿をそのまま発酵させてつくる「柿酢」を研究し、新たな名物特産品として商品化していく。「柿が赤くなる年は医者年青くなる」と言われるほど、栄養価も高く、高血圧予防・利尿作用など、健康食品である柿で作った柿酢なら、一年中使え、活用範囲もアイデア次第で広がる。シニアがつくったものでシニアが元

##### ●その四 商業・観光業の活性化

柿や柿酢を中心にした特産品・逸品づくりのため、ボランティア「料理クリエイター隊」が中心になり、商品開発と新メニューづくりを行う。町内の飲食店や旅館民宿が「わが店の逸品」としてお客様に提供することにより、観光客の立ち寄り増加など、誘客と消費拡大につなげたい。

こうして一般公募により、ボランティアグループが結成され、収穫した柿と多くの人の努力と知恵を結集して「秩父の柿酢」が誕生した。また、水や牛乳で薄めるだけで手軽に飲めるスィーツタイプの「のむかきす」も商品化された。

柿酢を使った料理コンテストの優秀作品と飲食店の工夫で、柿酢の酢飯を使った「柿酢寿司」、柿酢ベース



柿波染と女性部員



柿渋づくりのために柿のヘタ取り

柿渋で染めたのれん



「秩父シブガキ男の石鹸」



「秩父の柿酢」と「のむかきす」

のゼリー「柿のジュレ」、柿の果肉が入ったパン「ミソパーシモン」、干し柿の入ったそば団子「子守だんご」、爽やかな酔い心地の「焼酎の柿酢サワー」等々が一店逸品として飲食店のメニューに登場した。

柿酢プロジェクトは酢にとどまらず、「柿のわ事業」として継承されている。事業の推進過程で、女性部は柿渋染めなどの講習会を通じて、柿による地域おこしに、女性部らしい切り口で協力してきた。

秩父地方には昔は柿渋を投網や酒袋に使っていたという歴史があり、深みのあるよい色が出るということ、で、建築に活用しようという研究していた大工さんの指導で、柿渋づくりに挑戦した。秩父は獣害も多く、猿害には手を焼いている。青い柿なら猿が目をつけないうちに収穫可能だ。猿知恵の裏をかく柿渋だったが、驚きの成分だった。

文献によると、柿渋の歴史は古く、板塀や柱などの建築用塗料、漁網、酒の搾袋、養蚕用具、染色、漆器の下地などに使われてきた。また、火傷・あかぎれ・高血圧治療・蛇の毒消しなど、生活に重要な役割を果たしてきた。柿渋は清酒以上の価格で取引され、国内は言うに及ばず、遠くハワイや台湾・中国・朝鮮などに

も輸出されていたそうである。

柿渋は、青い未熟な柿をつぶし、絞りを醗酵させてつくる。独特の匂いのある褐色の液体で、乾くと防水効果があり、防腐・抗菌作用など、多面的な機能を持っている。

さらに、科学的研究では、室内環境汚染物質のホルムアルデヒドを吸着・除去し、室内濃度を低下させる効果が認められるという報告がされており、驚くほど消臭効果がある。しかも天然素材。「全国女性部連合会の女性部創業支援事業」の採択を受けたことを機に、積極的に事業に参加しようという立ち上がった。

昔憧れたあの人の香りも、今は加齢臭などと呼ばれている。柿渋の消臭効果を生かした体臭を洗い流す石鹸をつくって、「お父さん、臭い」と言わせない石鹸を、女性部がプロデュースした。

ボランティアグループ「しぶがき隊」と協力してつくった柿渋である。関わる人たちが自分で買って使える石鹸にしたいと、価格は低く抑えた。シニアがターゲットなので、しっかりと感を損なわないよう配慮し、全身に使うため、浴室に置いて溶けやすい石鹸にした。できた石鹸は、名付けて「秩父シブガキ男の石鹸」。狙っていた消臭効果は予想以上の

もので、「体臭はもとより、着ていたものがにおわない!」「子供の足のおいが取れた!」など、数多くの反響をいただいている。これでお父さんも香りだけは青年。この消臭効果を実感した奥様方にも使っていたにいたる。加齢臭は男女平等。今や、女も子供も使う「男の石鹸」となっている。

柿渋染めで「布ぞうり」や「コサージュ」「靴下」と、柿関連アイテムの充実に女性部は意欲的に取り組むことができ、柿の町皆野町の大きなパワーとなることができた。

こうして、多くの人の手で「柿のわ事業」は丸い円が描けるほどに広がりをを見せて、柿畑の持ち主には、お礼の代わりにでき上がった商品を出し上げ、大変喜ばれている。

これからも柿を中心に、まだまだ新製品を研究中。「しぶがき隊」は現在、隊長の八〇歳から下は五〇代のメンバーで、柿に夢を抱いて、生涯「夢現役」を合言葉に、あつと驚く新製品作りに挑んでいる。

今後は、環<sup>わ</sup>になって広がったこの事業を継続し発展させていくため、故郷を元気にしたいという地域への愛を大切にしながら、継続してける組織に生まれ変わっていくことが課題かと思われる。